

— 京都御所 —

参内殿 上段の間襖絵「漢の養蚕」

ようさん



参内殿上段の間の襖絵は「漢の養蚕」と題された16面で、安政内裏造営(1855年)の際に土佐光文が画きました。

蚕を飼育して、その繭から生糸を採る養蚕は、我が国では、弥生時代には中国から伝わっていたとされています。

養蚕には、一年を通して様々な作業があります。襖絵には中国漢の時代の養蚕農家の様子が場面ごとに画かれています。



近代皇室の御養蚕は、明治4年(1871年)に昭憲皇太后が始められ、その後の歴代皇后がお続けになり、皇室御養蚕という伝統となって継承されています。皇后陛下はこれを引き継がれ、紅葉山御養蚕所で一連の作業をなさっています。





— 京都御所 —

さんだいでん にしごえんざしき

参内殿 西御縁座敷

ろうぎよく

杉戸絵 「弄玉」



参内殿

さんだいでん

参内殿は御常御殿の北西側にある御殿で、正月に摂家・宮

家・大臣が参賀するときにはここから御常御殿に参上したり、

前庭では闘鶏などの行事をおこないました。西側の御縁座敷

にある杉戸には、かさかわゆうせん 笠川友泉による「弄玉」の絵が画かれていま

す。2面の杉戸の右側には弄玉が立ち、左には彼女と向かい

あつて鳳凰が羽ばたいています。

れっせんてん

中国の『列仙伝』という書物に依ると、弄玉は中国春秋時代

の秦の国王穆公しん ぼくこうの娘で、雅楽器の簫しょうを使い孔雀や鶴などを

呼び寄せることができる簫史しょうしという仙人のもとに嫁ぎました。

弄玉は簫史から簫を学び、数年経つころには、鳳凰の鳴き声に似せて簫が吹けるまでに上達し、弄玉が吹くと簫の音に誘われた鳳凰が家に飛んでくるようにまですました。そのため父の穆公は娘夫婦のために鳳台という楼台を建て、そこに住まわせました。その後、夫婦は鳳台から下りてなくなり、あるとき鳳凰と共に天へ昇っていったということです。





鳳凰は想像上の瑞鳥で、^{美しい}霊亀、応龍や麒麟と共に四霊の一つとされます。太平の時に湧きでる醴泉の水を飲み、^{れいせん}60～120年に一度だけ実を結ぶという竹の実だけを^{ごとう}食べ、梧桐(青桐)の木に宿るとされています。

聖天子の兆しとして平和な世にのみ姿を現すという古代中国の思想が伝わったもので、吉祥文様の一つとして使われ、紫宸殿の高御座(写真中段)などの調度や歴代の天皇が着用される^{こうるぜん}黄櫨染御袍の文様(桐竹鳳凰麒麟文)などにも用いられています。

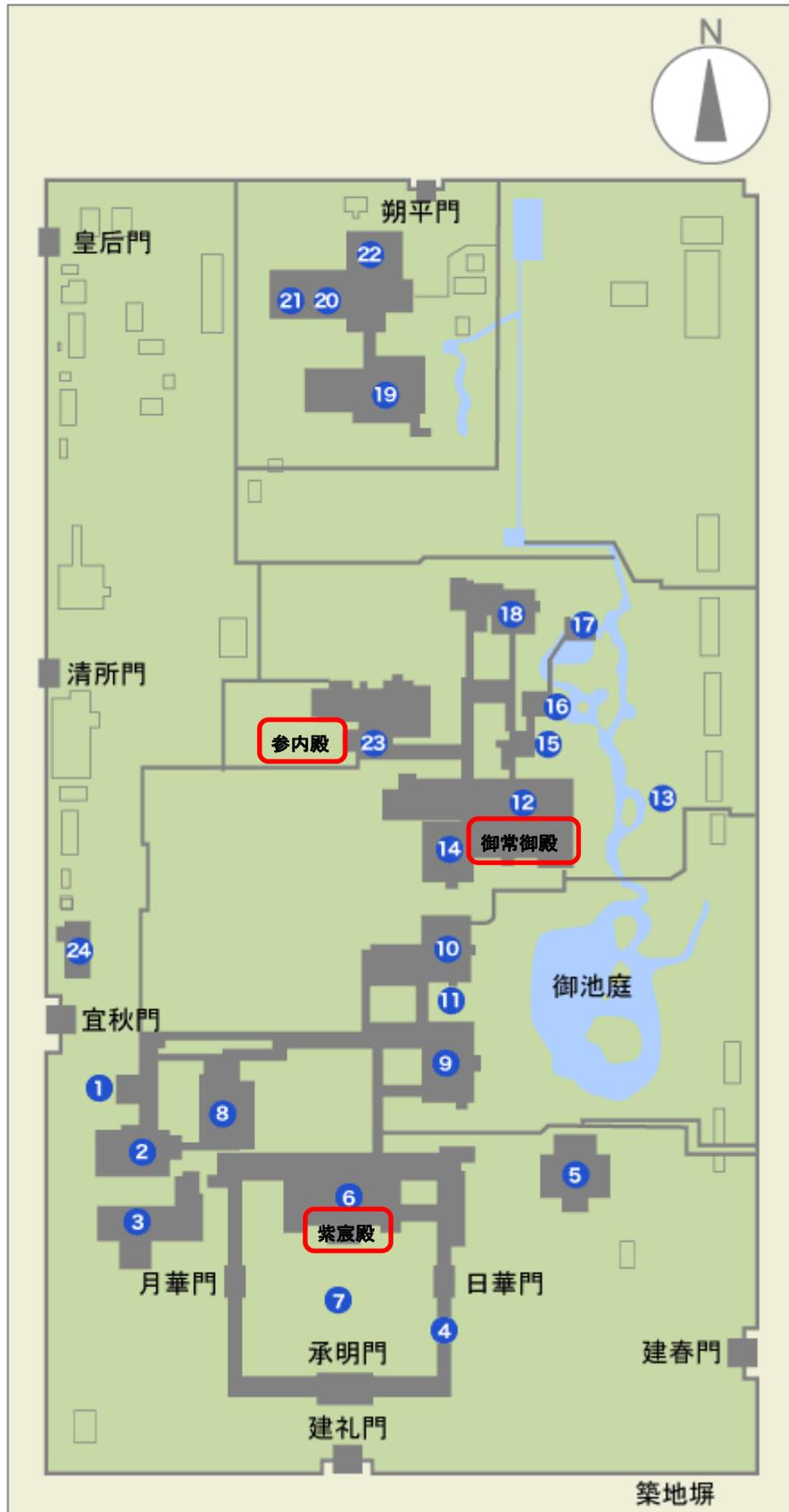


御常御殿 上段の間東面 「桐竹鳳凰図」画:狩野永岳



京都御所案内図

- ① 御車寄
- ② 諸大夫の間
- ③ 新御車寄
- ④ 回廊
- ⑤ 春興殿
- ⑥ 紫宸殿
- ⑦ 南庭
- ⑧ 清涼殿
- ⑨ 小御所
- ⑩ 御学問所
- ⑪ 蹴鞠の庭
- ⑫ 御常御殿
- ⑬ 御内庭
- ⑭ 御三間
- ⑮ 迎春
- ⑯ 御涼所
- ⑰ 聴雪
- ⑱ 御花御殿
- ⑲ 皇后宮常御殿
- ⑳ 若宮御殿
- ㉑ 姫宮御殿
- ㉒ 飛香舎
- ㉓ 参内殿
- ㉔ 参観者休所



観マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

通マークは、申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。

詳細は、<http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html> をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>
〒602-8611 京都市上京区京都御苑3 宮内庁京都事務所
代表電話：075-211-1211 参観係直通電話：075-211-1215